

— 告 告 —



陸田 駿弥 (りくた しゅんせ)
金沢工業大学大学院工学研究科
情報工学専攻
博士前期課程一年
広島県 修道高等学校出身

沈着冷静。世界へ羽ばたく データサイエンティストに。

KIT
キャンパス
レポート ④
文・杉村裕之

この号の発売から間もなく、陸田さんは海外企業研修生としてヨーロッパへ旅立つ。派遣先のポランドでは語学研修の後、来年三月まで、電力技術とIT技術を融合させた「スマートグリッド」で世界の先端をいく日立エナジーの社員として、開発の一翼を担う。

同社は世界七カ国に研究拠点を置き、二百名の研究者がパワーエ

レクトロニクスやAI、サイバーセキュリティ、データ解析及び機械学習など、次世代を見すえた最新技術に挑んでいる。陸田さんが携わるのは、米国立標準技術研究所が主導する「ポスト量子暗号標準化プロジェクト」の体系的な分析。要約すれば、量子コンピュータを用いても解読や偽造ができない新たな暗号技術の研究である。

陸田さんが選ばれた理工系学生向けの「バルカヌス・イン・ヨーロッパ」(一般財団法人・日欧産業協力センター主催) 事業は、KITでは初の快挙。そして、学部三年半で卒業し、大学院へ進学する「早期卒業制度」でも、彼が一期生である。人一倍の知識欲と向上心を知るに十分なエピソードだが、真骨頂は優しい目の奥に秘められた冷静な知性にあると思った。

それは、三年次に参加した金沢医科大学との連携による研究テーマ「がん画像診断支援システムの開発」にふれた時だった。AIを使った病理診断でカギを握る「判断根拠の提示」がうまくできない従来の手法を離れ、がんを識別する情報量の多い画像の特徴を統計的に見積もる「情報密度法」に挑戦するチームの中で、がん領域を高い精度で切り出す手法を提案し、課題解決の可能性を示すことができたのだという。

成果を情報処理学会の全国大会で発表し、学生奨励賞を二年連続で受賞した陸田さん。常識にとらわれない柔軟な発想力も含めて、どんな成長の軌跡をたどってきたのか。「中高一貫の進学校で山岳部に入り、素晴らしい人格の顧問や仲間にも恵まれ、充実した六年間で

「部活の競技登山は、体力のほか歩行や設営の技術、天気図や行程計画表の作成、装備などを総合してチームで競う。この経験が、彼の土台なのだ」と得心がいった。帰国後は、KITがデュアルディグリー制度(最短二年で両校の修士号取得)を結ぶ名門ロチェスター工科大学(米国)への留学も描く。データサイエンティストとして世界へ羽ばたこうとする視界の先には、片雲なき青空が広がっているようだ。

金沢工業大学

石川県野々市市馬が丘五七一
電話番号 〇七六二四八二〇〇